

栗東歴史民俗博物館

## 特集展示「近江の近世 高僧たちの仏教文化」

平成 24 年 6 月 9 日(土) ~ 平成 24 年 7 月 16 日(月・祝)

ご あ い さ つ

今日みられる近江の寺院の多くは、中世以来の戦乱によって荒廃した後、近世になって復興していったものです。

たとえば、近江を代表する名刹、臨済宗の瑞石山永源寺は開山・寂室元光(1290~1367)の示寂の後、幾多の戦乱を経て、その寺勢は次第に衰退していきました。一絲文守(1608~1646)が迎えられて以降、ようやく往時の栄華を取り戻すこととなります。また栗東でも、戦渦の果てにその寺観を全く失ってしまった地域の中核寺院 - 東方山安養寺がありました。安養寺は、真言律の高僧として知られた戒山慧堅(1649~1704)を迎えることによって、真言律宗の新たな寺院として再興していきました。

今回、注目する永源寺と安養寺は、近世の仏教文化を考える上で注目すべき文化財を持っています。そこで、一絲文守や戒山慧堅などの高僧が遺した書蹟・典籍や関連する文化財に注目して、近江に花開いた仏教文化の一側面を紹介しようとするのがこの特集展示です。

ご観覧の皆様方におかれましては、本展示によって近世の仏教文化への理解を深めて頂ければ幸いです。

平成 24 年 6 月 9 日  
栗東歴史民俗博物館

## 解説集

### 中世から近世へ

中世以来、戦渦によって衰微を余儀なくされていた数多くの寺院は、近世の徳川政権による安定した支配の下で、次第に復興への道を歩んでいきます。ここでは、その前段階として、中世の騒乱が寺院にもたらした一幕をみてみることにします。

瑞石山永源寺は、東近江市永源寺高野町に所在する臨済宗永源寺派の大本山。その歴史は、大陸に参禅した寂室元光(1290～1367)が、近江国守護・六角氏頼(1326～70)より献じられた風光明媚な地「雷溪」に寺を開いたことに始まります。

また、栗東市安養寺に所在する東方山安養寺は、現在は真言宗泉涌寺派に属しますが、古くは天平12年(740)良弁僧正の開基、承和元年(834)藤原冬嗣の本願により建立など、様々な伝承を伝える古刹であり、中世には広大な寺観を誇っています。

この二つの寺院を通して、近世の仏教文化の一端を見ていきます。

・瑞石歴代雑記 3冊 (重要文化財 永源寺文書のうち 8459～8461)

(各)紙本墨書 縦26.9cm 横19.4cm

江戸時代 弘化4年(1847)

東近江市 永源寺蔵

---

永源寺の開山・寂室元光の生まれた正応3年(1290)から、一絲文守らによる中興の節目となる開山300年遠忌が行われた寛文元年(1661)まで、永源寺の歴史を編年体で記す。

永禄6年(1563)から翌7年にかけて、土豪の小倉右近大夫によって、「山上寺家中」、「永安寺谷中」、永安寺・興源寺・退蔵寺・永源寺・含空院・曹源寺の「山上六ヶ寺」が次々に焼亡させられる事件が起こった。これによって「蕃場谷識廬谷第一寺」のみとなった永源寺は、さらに大檀越の六角氏が織田信長によって近江から放逐されるに至って、決定的な衰退期を迎えた。

・東方山安養寺本堂再建勸進状 1巻 (栗東市指定文化財)

紙本墨書 縦31.7cm 横128.5cm

室町時代 大永4年(1524)

栗東市 東方山安養寺蔵

---

東方山安養寺が承和元年(834)に近衛関白によって開創されたという伝承とともに、「先年征夷大將軍(義尚)が陣をおいたときに堂塔僧房は破損され、本尊も雨露に侵されている」と述べ、本堂再建にかかわる奉加を求めている。

長享元年(1487)、六角高頼を討つため自ら近江に出陣した室町幕府の第9代将軍・足利義尚は、10月4日から27日まで東方山安養寺に陣を敷いた後、近隣の真宝館に移った。帯陣はわずかな期間であったが、安養寺における影響は小さなものではなく、その後の衰退の遠因となった。

## 中興の時代 一絲と戒山

徳川氏による政権交代がなつた江戸時代、仏教界でも新たな時代が迎えられ、数多くの寺院で中興が果たされることとなります。

一絲文守(1608～1646)は、京の岩倉具堯の三男に生まれ、幼少より学業に秀でて、読書を好んだといひます。19歳のとき、禅書に触れて出家の志を持ち、堺の沢庵宗彭を訪ねたのを契機として、京・槇尾山西明寺の賢俊良永のもとで戒律を学び出家しました。後に、永源寺の住持に招かれて、その再興を担いました。

また、戒山慧堅(1649～1704)は久留米(現、福岡県)に生まれ、17歳のとき、郷里の千光寺で鉄眼道光より教えを受けて出家します。河内・野中寺を再興した慈忍慧猛(1613～75)のもとで真言律に転じた後、東方山安養寺の復興を果たしました。

各地で果たされた寺院の中興は、その中心にあった僧侶たちによる仏教の興隆なくして語ることはできないのです。

・寂室録 2冊

紙本墨刷 縦 28.7 cm 横 19.4 cm

江戸時代

東近江市 永源寺蔵

---

『寂室録』は永源寺の開山・寂室元光による詩文を収めたもの。本資料は江戸時代に刊行され、巻末には永源寺の中興・一絲文守による『江州永源寺開山円応禅師行状』が付せられる。

康安元年(1361)正月18日、はじめて雷溪を訪れた寂室は「林溪幽邃頗愜野情」(林が間近までせまった溪谷の奥深く物静かなありさまは、たいへん快く野趣にとむ)という景観を見て、ここに留まることを決めたという。

・関東紀行 1巻

(重要文化財 永源寺文書のうち 8411)

一絲文守(1608～1646)筆

紙本墨書 縦 30.6 cm 横 318.6 cm

江戸時代 寛永6年(1629)

東近江市 永源寺蔵

---

出羽(山形)への旅次に遇した名勝の数々を書き連ねたもの。当時22歳の一絲の若々しい筆致や推敲の痕には、幼きころより学問・詩文に秀でたという天賦(てんぷ)の才を偲(しの)ぶものがある。

寛永4年(1627)より堺・南宗寺の沢庵宗彭(1573～1645)に師事した一絲は、寛永6年の紫衣事件に際して沢庵が出羽に配流されると、あとを追って出羽へ赴き、帰京後は寛永8年より後水尾天皇の帰依をうけている。

なお、本品は、永源寺ゆかりの黄檗僧・月潭道澄(1636～1713)が元禄14年(1701)に永源寺

へ寄進したものである。

・一絲文守墨蹟 生死事大偈 1幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8352)  
一絲文守(1608～1646)筆  
紙本墨書 縦 31.2 cm 横 63.9 cm  
江戸時代 17世紀  
東近江市 永源寺蔵

---

「生死事大、無常迅速」という語は、人の生死のこと、時のうつろいのことを示し、一日一日を大事に生きよと説く代表的な禅語を書く。もっとも「開山禅祖常にこの語を書いて見せ示す」とあるように、永源寺へ入寺した一絲の、寂室元光への傾倒を窺うべきものであろう。

一絲の語録『仏頂国師語録』によれば、彼が永源寺入寺を決意したのは、大陸に参禅し、俗世の喧噪を離れて修行に励んだ寂室の禅風に惹かれたからであると伝えている。

・一絲文守墨蹟 開山忌偈 1幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8377)  
一絲文守(1608～1646)筆  
紙本墨書 縦 31.7 cm 横 58.7 cm  
江戸時代 正保元年(1644)  
東近江市 永源寺蔵

---

「再び忌景に逢うて兜楼を熬く、この門庭寂寞の秋をいかんせん、もし永源真の水脈を諳んぜば、何ぞ今復た支流を預かることを妨げん」と詠む。永源寺に住持して二度目の開山忌の時、なお復興の進まない寺内の景色を見つめ、どのような妨げがあっても成し遂げることを決意し、寂室の法脈を預かることへの意識を改めている。

ここにみる一絲の書風は、伸びやかな運筆で表された連綿体に特徴があり、彼の書のなかで特に優れている。10月1日に行われる開山忌に掛けられたものと思われ、何度も納得いくまで書き直したのであろう。

・空子元普法語(印證 授一絲文守) 1幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8372)  
空子元普(1604～1665)筆  
紙本墨書 縦 27.9 cm 横 54.5 cm  
江戸時代 正保2年(1645)  
東近江市 永源寺蔵

---

別峰紹印の後を継ぎ、一絲文守に永源寺を譲った79世住持・空子元普は、一絲より伝法の印證が求められたことによって一偈を示し、寺に伝来する寂室元光の法衣、自らの師である龍山宗昆の竹篋などを与えて、その証明にしたと記している。

大檀越を持たない当時の永源寺が再び興隆するには新たな庇護者の尽力が不可欠であり、そこで寺の後継として見定められたのが朝廷からの帰依の厚い一絲であった。そのため、空子はた

びたび一絲に入寺を働きかけ、寛永 20 年(1643)に実現させた後は、自ら西明寺に退いている。

・後水尾天皇宸翰 釈迦名号 1 幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8346)  
後水尾天皇(1596～1680)筆  
紙本墨書 縦 121.8 cm 横 26.6 cm  
江戸時代 正保 2 年(1645)  
東近江市 永源寺蔵

---

ゆったりとした筆運びながら、優美さと力強さを兼ね備えた書風であり、江戸時代文化史に巨大な足跡をのこした後水尾天皇の特色をよく表している。

一絲が永源寺にあったのは3年ほどの期間であるが、彼を慕う人々からの寄進は跡を絶たなかった。一絲文守の最大の庇護者は、後水尾天皇であった。本品の裏書には「慶長皇帝宸翰 / 住持一絲文守置之 / 正保二年乙酉年仏誕生日」とあって、その関係を窺えよう。一絲亡き後、後水尾天皇は黄檗の隠元隆琦に師事している。

・大寂塔供養香語 1 幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8390)  
如雪文岩(1601～1671)筆  
紙本墨書 縦 31.0 cm 横 54.2 cm  
江戸時代 万治元年(1658)  
東近江市 永源寺蔵

---

永和 3 年(1377)創建の「大寂塔」と呼ばれた開山堂は、永禄 6 年(1563)の兵火で壊滅していた。万治元年(1658)、後水尾天皇の中宮・東福門院より費用の寄進をうけて再建され、その落慶を祝って述べられた言葉。

如雪は、はじめ密教を学び、賢俊良永のもとで戒律を学んだ後、宇治田原の巖松院に寓した。その後、中国へ渡り禅律を学ぼうとするも国禁により断念して、一絲文守のもとを訪れた。その示寂後、永源寺を継いでいる。

なお、大寂塔は享保 9 年(1724)に再び焼失するも、彦根藩主・井伊直惟が能舞台を寄進することとで再建し、今日に至っている。

・別峰紹印像 如雪文岩賛 1 幅  
木村徳心(1593～?)筆  
絹本着色 縦 112.2 cm 横 50.2 cm  
江戸時代 万治 2 年(1659)  
東近江市 永源寺蔵

---

杖を持つ初老の姿で描かれた別峰紹印(?～1641)の頂相。別峰は熱田(名古屋)の龍珠寺を経て、寂室の禅を慕い永源寺に来寺したという。自ら石を引き、泥を運んで復興に携わったと伝えられ、寛永 9 年には方丈を再建するなど、永禄 9 年(1564)の焼亡で悉く堂舎を失った永源寺の復

興をすすめた。

木村徳応は当時、京の著名な絵仏師で、黄檗僧の頂相なども数多く制作している。賛は一絲文守の後を継いだ如雪文岩によるが、『交割帳』によれば、妙心寺の175世住持・絶江紹隄より如雪に贈られたものである。

・東福門院女房奉書写 1通 (重要文化財 永源寺文書のうち 137)  
紙本墨書 縦 33.0cm 横 30.3cm  
江戸時代 万治2年(1659)頃  
東近江市 永源寺蔵

---

東福門院の意向をうけた女房より、彦根藩主・井伊直澄にあてて永源寺を保護するよう依頼した。直澄は万治2年に藩主となっている。

永源寺の一絲文守は近年の名僧で、後水尾院・東福門院は厚く一絲に皈依していたと伝える。さらに、一絲住持の時より先代藩主の井伊直孝に永源寺の保護を依頼しているが、未だ果たされないままである、そこで直澄には永源寺の保護を果たしてもらいたと願い出ている。

これをうけた直澄は承諾の旨を返信しており、以後、永源寺は彦根藩・井伊家の庇護を得ることになった。

・永源寺交割帳 1帖 (重要文化財 永源寺文書のうち 8446)  
紙本墨書 縦 31.8cm 横 13.2cm  
江戸時代 寛文5年(1665)～宝永元年(1704)  
東近江市 永源寺蔵

---

禅寺において、僧堂で役の者が交替する際に新旧両者が立ち会って公私の器物の点検・仕分けをすることを交割といい、その記録を交割帳という。

1000点を越える什物が記されており、寄進時期や寄進者などを知ることができるものも多い。ここに記される什物の多くは、80世・一絲文守から81世・如雪文岩の時代に什物の多くが整えられていることや、後水尾天皇、東福門院(後水尾天皇中宮、徳川秀忠娘)をはじめ、公家や村人に至るまでが什物の寄進に関わっていたことがわかる。随時書き加えられたようで、確認できる最も新しい年号は、宝永元年(1704)である。

・永源諸法式 1冊 (重要文化財 永源寺文書のうち 8436)  
紙本墨書 縦 25.3cm 横 19.5cm  
江戸時代 享保3年(1718)  
東近江市 永源寺蔵

---

伽藍や什物の整備が行き届いた頃、安定期を迎えた永源寺において、永源寺をはじめとする一派寺院に関する様々な取り決めを集めたもの。

「本山法度九条」では、本山での過ごし方、伝法の規定、着衣の規定、安居(夏場の集団修行)

の实践、開山忌への出席、寺院所有物の管理、得度に関すること、寂室の禅風を守り寺院を廃れさせないように努めること、火事等の防止をおろそかにするものを追放することなどを制定している。

・鉤太右衛門書状 戒山慧堅宛 1通 (東方山安養寺文書のうち 02-002)  
紙本墨書 縦 30.0 cm 横 30.8 cm  
江戸時代 貞享2年(1685)4月21日付  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

安養寺村の庄屋・鉤太右衛門が安養寺に入寺した戒山慧堅に宛てて、寺の再興を往古の本名のままで行ってほしい旨を願い出ている。

戒山慧堅が安養寺に入寺する貞享2年、往時の寺観はすでに失われて、薬師堂を残すのみにまで廃退していた。このような状況のなか、地名の由来ともなった「東方山安養寺」という由緒ある寺名は、ときに「安養山東方寺」と呼び誤られる始末であった。

なお、文中に見える「大永の記録」とは、大永4年(1524)の(東方山安養寺本堂再建勸進状)を指し、村びとの手で守り伝えられていたのであろう。

・境内田畠年貢免許状 戒山慧堅宛 1通 (東方山安養寺文書のうち 02-001)  
紙本墨書 縦 34.2 cm 横 52.5 cm  
江戸時代 貞享4年(1687)正月付  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

安養寺村は江戸時代を通して前橋藩(群馬)の支配を受けた。寺の再興後、その境内に入った田畠について、7斗1升8合分の年貢を赦免とすることを戒山慧堅に伝えている。

当時の前橋藩主・酒井忠孝(1648～1720)は、綱吉から吉宗の徳川四代に仕え、老中並に重用されるなど活躍する一方、藩政では儒学による文治政治を実践し、酒井氏歴代で随一の名君に挙げられる。特に、戒山への帰依が厚く、寺の建つ安養寺山を寄進している。寛延2年(1749)に酒井氏が姫路へ転封して以後、松平氏が安養寺村を治めている。

・東方山安養寺中興祖戒山堅和尚伝 1巻  
湛堂慧淑(1669～1720)筆  
紙本墨書 縦 27.6 cm 横 985.2 cm  
江戸時代 宝永元年(1704)  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

東方山安養寺を再興した戒山慧堅の没後まもなく、弟子の湛堂によって書かれた行状記。その生まれ、出家の過程、修行の様子、交友や靈験などを記す。

戒山は、はじめに久留米(福岡)で黄檗僧・鉄眼道光に師事し、後に河内(大阪)に渡って慈忍慧猛より戒を受けた。鉄眼は黄檗版一切経の板行事業で知られる。慈忍は近世の戒律復興運動

の中心にいた人物で、野中寺の中興開山となった。黄檗僧の南源性派・高泉性澈は、戒山の代表的な著述『律苑僧宝伝』に序文を寄せている。

・伝法灌頂紹書 授戒山慧堅 1通 (東方山安養寺文書のうち 14-036)  
慈門信光(1624～1707)筆  
紙本墨書 縦 33.4 cm 横 49.0 cm  
江戸時代 延宝9年(1681)3月21日付  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

河内・野中寺中興2世の慈門信光は、西大寺流の伝法灌頂を戒山に授けた。伝法灌頂とは、密教における最も重要な儀式のひとつであり、これによって阿闍梨位を得ると、人の師となることができる。これを伝法灌頂の第一段階とする。

慧猛の示寂後、戒山は野中寺を離れて京都・深草や近江・谷口、洛北・花園などを遍歴していた。その後、法兄にあたる信光に招かれて再び野中寺に戻ると、西大寺流ならびに松橋方の伝法灌頂を受けた。

・当流伝授次第目録 西大寺流 1冊 (東方山安養寺文書のうち 11-001)  
戒山慧堅(1649～1704)筆  
紙本墨書 縦 16.8 cm 横 16.7 cm  
江戸時代 延宝9年(1681)2月18日付  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

延宝9年、戒山は法兄の慈門より伝法灌頂を受けると同時に西大寺流や松橋方の聖教を数多く伝授することになった。本書は西大寺流の伝授目録で、戒山自筆の奥書がある。

ここに記される聖教の多くは今も安養寺に伝来している。これらの聖教には、朱文長方印「永鎮安養律寺」が捺されており、散逸することなく今日まで伝えられている。

・伝授要約 示湛堂慧淑等 1通 (東方山安養寺文書のうち 14-001)  
戒山慧堅(1649～1704)筆  
紙本墨書 縦 30.9 cm 横 118.6 cm  
江戸時代 元禄13年(1700)10月付  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

戒山は数多くの聖教類を安養寺に伝えた。それらを弟子に引き継がせるにあたって、大切に保管し散逸を防ぐこと、引き継ぐに値する弟子が居なかった場合は本山(河内・野中寺)に返納することなどを誓約させたのが本品である。この後、戒山は安養寺を退いて、京都・浄慈庵に移っている。

末尾に花押と印章を並べる湛堂慧淑・月江道照・実門元透・香州見生・義州道廣は、戒山の弟子のうち主要な5名にあたる。湛堂慧淑は安養寺2世となり、実門元透(実門慧亨と改める)は3



世となり、ともに一派の本山・野中寺の住持をも勤めている。

・冥授印信 授戒山慧堅 1通 (東方山安養寺文書のうち 14-025)

慈門信光(1624～1707)筆

紙本墨書 縦 31.0 cm 横 136.4 cm

江戸時代 元禄 12 年(1699)4 月 8 日付

栗東市 東方山安養寺蔵

---

真言律宗の僧にとって最も重要な儀式は受戒であった。「三摩耶灌頂」とも呼ぶ戒法灌頂の印明は、鎌倉時代の叡尊以来、脈々と受け継がれる西大寺流の印明の中でも特に重要なものであると記している。

戒法灌頂とは、僧侶が守るべき生活規範である戒を受ける儀式である。この儀式を執り行う能力を認められた証明に授けられるものが本書であり、奈良・西大寺の長老をつとめた高喜より慈忍和尚に授けられ、信光は慈忍和尚より伝授を受け、法弟の戒山に伝授した。

・慈門信光書状 一流御衆中宛 1通 (東方山安養寺文書のうち 14-033)

慈門信光(1624～1707)筆

紙本墨書 縦 30.9 cm 横 39.8 cm

江戸時代 元禄 16 年(1703)5 月 3 日付

栗東市 東方山安養寺蔵

---

元禄 16 年 5 月 3 日、慈門信光は野中寺一派中の僧に向けて書状を送った。野中寺住持職は僧坊を相続すること、輪番は 3 年を目処にすること、住持・輪番は力を合わせて「先師の遺意」をなしとげるべきであることなど、野中寺一派の心構えを説いている。

野中寺の僧坊は、戒律(僧侶の生活規範)を学ぶための道場であり、これを興隆させることが「先師の遺意」にかなうことであった。野中寺のほか、西明寺・神鳳寺は、近世の「律院三僧坊」と総称され、江戸時代の仏教文化の一つの潮流の中心にあった。

・慈門信光書状 戒山慧堅宛 1通 (東方山安養寺文書のうち 14-034)

慈門信光(1624～1707)筆

紙本墨書 縦 29.5 cm 横 46.4 cm

江戸時代 元禄 16 年(1703)8 月 8 日付

栗東市 東方山安養寺蔵

---

野中寺を再興した慈忍慧猛の示寂後、住持職を継いだ慈門であったが、老衰のために住持職を譲ることとなった。一派の衆中と評定した後、慈門の法弟であった戒山に住持職を継ぐように依頼している。

野中寺を継いだ戒山は、わずか半年後、元禄 17 年 3 月 4 日に示寂している。

・律門西生録 1冊  
湛堂慧淑(1669～1720)撰  
紙本墨書 縦27.5cm 横19.0cm  
江戸時代 元禄5年(1692)成立  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

西方浄土に往生した中国・日本の律僧44名の伝記を記す。序文は戒山慧堅によるもので、本書は戒山の著述『律苑僧宝伝』に倣って編述されている。古くは鑑真などの名も見えるが、江戸時代には明忍俊正、賢俊良永、慈忍慧猛、真政円忍など6名を挙げている。

賢俊良永のもとでは多くの僧が戒律を学んでおり、一絲文守や如雪文岩も含まれる。また、慈忍慧猛のもとで戒律を学んだ僧には鉄眼道光がいる。

なお、本書は安養寺7世の希円慧鑑(?～1811)によって寛政9年(1797)に書写されたものである。

#### 黄檗の交遊 隠元と周辺

江戸時代の仏教界で最も反響の大きかった出来事のひとつには、中国より隠元隆琦(1592～1673)が渡来したことを挙げられるでしょう。彼のもとには、渡来僧のみならず、数多くの日本僧も参じており、幕府や朝廷からの帰依も厚く受けていました。

寛文元年(1661)、京都・宇治の地に黄檗山万福寺を創建した隠元は、永源寺に赴き、再建された開山堂の額字を揮毫しています。一絲の後を継いだ如雪文岩は、中国へ渡航して仏教を学ぼうとしたようですが、国禁であるため果たせず、代わりに一絲に参じましたが、隠元渡来以降は黄檗僧と親しく交わっていたようです。

隠元がもたらしたものは数多くありますが、特に仏教界で求められたのは正式な戒律であったでしょう。黄檗宗の僧は、戒律研究に熱心であった真言律宗の僧とは殊のほか親しく、東方山安養寺には、その交遊関係を示す遺品が多く伝えられています。

・隠元隆琦墨蹟 大寂塔(額字) 1幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8328)  
隠元隆琦(1592～1673)筆  
紙本墨書 縦55.3cm 横137.9cm  
江戸時代 万治3年(1660)  
東近江市 永源寺蔵

---

万治元年(1658)、中宮・東福門院の寄進によって再建された開山堂の額字。黄檗僧の書風は流れるような運筆が特徴である。中でも「黄檗三筆」と謳われる隠元の書風は、躍動感あふれる圧倒的な墨線に見応えがあり、書に堪能であった渡来僧たちの中でも抜きん出たものである。

隠元は、承応3年(1654)に大陸より渡来した高僧。永源寺開山堂が再建された年には、第4代将軍徳川家綱に謁見して、京都宇治の地を賜っている。寛文元年(1661)、この地に黄檗山万福

寺を開創し、臨済宗黄檗派(現、黄檗宗)を開いた。

・独立性易墨蹟 重玄門(額字) 1幅 (重要文化財 永源寺文書のうち 8324)

独立性易(1594～1672)筆

紙本墨書 縦 51.5 cm 横 133.5 cm

江戸時代 万治3年(1660)

東近江市 永源寺蔵

---

「重玄門」は永源寺の山門で、本書はそこに掲げられた額字。本品にみられるような独立の書風は、黄檗僧の流麗なものとは異なっており、独特な存在感を放っている。

承応2年(1653)に来朝した独立は、その翌年に隠元に参じて僧となった。以後、隠元に付き従ったという。万治3年は、隠元の永源寺訪問と同じ年であり、やはり隠元に同行して永源寺を訪れたのであろう。

独立性易筆の額字は、このほかに禅堂と食堂のものが伝来しており、ともに万治3年に如雪文岩によって永源寺に安置された。

・瑞阜紀勝 1巻 (重要文化財 永源寺文書のうち 8381)

月潭道澄(1636～1713)筆

紙本墨書 縦 29.4 cm 横 202.4 cm

江戸時代 貞享4年(1687)

東近江市 永源寺蔵

---

永源寺を経て黄檗僧となった月潭道澄が瑞石山一帯の名勝を詠んだ27篇の七言四句を集めたもの。

彦根出身の月潭は12歳で永源寺に登ると、当時の住持・如雪文岩を敬慕して出家を望むようになったという。慶安3年(1650)に出家が適うと、翌年には一絲法弟である独照性円に参じ、再び永源寺へ登って如雪にまみえている。承応3年(1654)、独照とともに隠元に参じた。

独照の開いた京都嵯峨・直指庵を継いで2世住持となった月潭は、一絲文守(関東紀行)を寄進するなど、永源寺を深く気に掛けている。

・観音新験録 1冊 (東方山安養寺文書のうち 21-051)

月潭道澄(1636～1713)撰

紙本墨刷 縦 27.7 cm 横 19.4 cm

江戸時代 元禄9年(1696)刊行

栗東市 東方山安養寺蔵

---

観音に関する多くの霊験を収録する本書には、永源寺の一絲文守に関する話が収められている。一絲が示寂すると、その生前の功德によって、後水尾天皇の夢の中に観音を手に乗けて現れたと伝える。

著者の月潭道澄は、はじめに永源寺を経て出家し、隠元隆琦に参じた黄檗僧である。万治3年(1660)、隠元より受戒(黄檗第一次開戒)して以後、渡来僧たちの中でも重んじられ、隠元の従者としてよく従ったという。

本書には、朱文長方印「永鎮安養律寺」が捺されている。月潭は安養寺の僧と親しく交遊しており、その什宝中には彼の著述も多く残っている。

・地蔵菩薩感应伝 1冊 (東方山安養寺文書のうち 21-007)

晦巖道熙(生没年不詳)撰

紙本墨刷 縦 27.0 cm 横 17.6 cm

江戸時代 貞享4年(1687)刊行

栗東市 東方山安養寺蔵

---

天和元年(1681)、京都伏見・仏国寺の高泉性激を訪ねたのを機に、晦巖道熙は山内の指柏軒に寓居した。本書はこの時の著述にかかり、古今の地蔵菩薩の靈験を記す。二人は親しい間柄で、貞享元年(1684)の晦巖編『新撰梅花百詠』などにも高泉の序文がある。朱文長方印「永鎮安養律寺」が捺される本書は、高(こう)泉(せん)周辺との交遊の中で収められたものだろう。

なお、この板本の下書きは、黄檗宗草創期に精美な明朝体をあやつって多くの下書きを行った岡元春による。奥付に彼の筆跡であることを明記するものは多い。

・江左新艸 1冊

湛堂慧淑(1669～1720)撰

紙本墨書 縦 24.8 cm 横 16.5 cm

江戸時代 18世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

元禄12年(1699)から宝永2年(1705)にいたる安養寺2世・湛堂慧淑の贄や偈を収めたもの。本書には「和州秦楽寺蔵本」の蔵書印が捺されており、黄檗僧・聞中浄復(1739～1829)の記す文化3年(1806)の序文を収める。

聞中によれば、安養寺7世となる希円慧鑑によって長らく知られていなかった湛堂の著述3篇が奈良・秦楽寺にて発見されたという。湛堂には高泉性激や月潭道澄ら黄檗僧と親しく交わっていた縁があったので、黄檗僧である自身が序文を記すことになったのだという。

・西遊漫録 1冊

湛堂慧淑(1669～1720)撰

紙本墨書 縦 24.8cm 横 16.5cm

江戸時代 18世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

熊本(肥後)・長崎(肥前)をめぐる九州への旅を湛堂が書き記したもの。元禄14年(1701)、熊

本・神護寺の憲応僧都より依頼をうけた湛堂は、船で同地に向かい各所の寺院をめぐった後、島原を経て長崎に渡り、興福寺に赴くと、そこで渡来僧・悦峰道章(1655～1734)と出会っている。

悦峰道章は、隠元隆琦の孫弟子にあたり、後に万福寺 8 世となった人物である。万福寺に入るまでの 22 年間、彼が住持をつとめた興福寺は、隠元隆琦が日本に来て最初に入った寺でもある。

・卯瑞稿 2 冊

湛堂慧淑(1669～1720)撰

(各)紙本墨書 縦 24.8cm 横 16.5cm

江戸時代 18 世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

正徳元年(1711)から享保 4 年(1719)までの詩文集で「偈」・「文」の二冊からなる。正徳元年 9 月より野中寺住持となった湛堂は、正徳 3 年に『青龍清規』のための序文を著している。

『青龍清規』は、貞享 2 年(1684)にたてられた規約をもとに、湛堂が増補を加えて編述した野中寺の清規。清規とは、本来、禅宗における修行僧が典拠とすべき修行の生活規則であり、さまざまな規則を守って修行に励むことは僧団にとって最も重要であった。このような名称をとるのは、湛堂の黄檗派への接近に由来している。

・戒場本尊三聖像(釈迦・文殊・弥勒) 3 幅対

卓峰道秀(1652～1714)筆

(各)絹本着色 縦 126.2 cm 横 65.1 cm

江戸時代 元禄 13 年(1700)

栗東市 東方山安養寺蔵

---

中幅に釈迦如来を置き、左右に僧形の文殊菩薩・弥勒菩薩を置く三尊像。『観普賢経』に基づいて行う受戒会に用いられる本尊である。

卓峰道秀は、西本願寺絵所の徳力善雪の長子に生まれ、浄土真宗の僧となった後、隠元隆琦高弟の高泉性激に師事して黄檗に転じた画僧である。これを収める箱蓋(ふた)には、元禄 13 年に安養寺 2 世の湛堂慧淑のもとに入ったことを墨書する。また、湛堂の著述集『江左新艸』には、卓峰から贈られた「釈迦・文殊・弥勒三聖像」に対して、湛堂が卓峰に贈った詩文を採録している。

なお、この三尊像の類例には、延宝 5 年(1766)に黄檗僧の松雲元慶と真言律僧の宝山湛海による共作で、真政円忍中興の和泉・神鳳寺に旧蔵された木造釈迦三尊像(大阪・光明院蔵)がある。

・弥勒菩薩像 1 幅

照山元揺(1634～1724)筆

絹本着色 縦 128.2 cm 横 57.1 cm

江戸時代 宝永2年(1705)

栗東市 東方山安養寺蔵

---

蓮華座上に結跏趺坐し、腹前に定印を結んで五輪塔を載せる弥勒菩薩像。身色を金泥、着衣を彩色で表し、画絹の裏からも彩色を施している。これを収める箱蓋の墨書に作者と制作年が伝えられる。

後水尾天皇の皇女である照山は、一絲や隠元に参禅して林丘寺を開いた。狩野安信・卓峰道秀に絵を学び、多くの観音菩薩像を描くが、これほどに謹直な作例は見当たらない。なお、月潭道澄が宝永5年(1708)に記した安養寺所蔵(観音大士像記)には、宝永4年、照山が自筆の「戒場本尊三聖像」を湛堂に贈ったとあり、本像がこれにあたる可能性も少なくはない。

・出山釈迦・蓮鷺・竹鶏図 3幅対

狩野安信(1613~85)筆

(各)絹本墨画淡彩 縦100.5cm 横39.0cm

江戸時代 17世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

軽妙な筆法によって表された釈迦や鷺・鶏は、江戸狩野の画風をよく表している。狩野安信は、江戸時代の画壇を席卷した狩野派頭領である狩野探幽の末弟で、中橋狩野家の祖となった絵師。

探幽をはじめとして、徳川將軍家の御用を勤めた狩野家の絵師たちは、黄檗僧たちとも交流を持っていた。安信は、後水尾天皇の皇女であった林丘寺宮照山元揺の絵の師匠でもあったという。黄檗や朝廷をめぐる繋がりから安養寺にもたらされたのであろう。

### 江戸の学僧 浄厳と慈雲

江戸時代における仏教の興隆は、宗教的側面からみれば、学問研究にいそしんだ僧侶たちあつてのものだといえるでしょう。なかでも、当時を代表する学僧に挙げられるのが浄厳と慈雲です。

覚彦浄厳(1639~1702)は、河内錦部郡(大阪府河内長野市)の生まれで、新古の真言宗諸流派を統合して、新安祥寺流と呼ばれる一派を起こし、その著述は百部余りに及んでいます。

また、慈雲飲光(1718~1804)は、大坂中ノ島の高松藩蔵屋敷(くらやしき)に生まれ、真言宗に限らず、あらゆる宗派を学んで、釈迦の時代への回帰を唱えるようになりました。特に、一千巻に及ぶ著述『梵学律梁』は、世界的に優れた梵学研究書と知られています。

二人の碩学は、戒律復興、民衆教化、学問研究など、多方面に励み、仏教界に大きな足跡を残しています。ここでは、東方山安養寺所蔵品より、浄厳の著述や慈雲の墨跡を紹介します。

・版本両界曼荼羅 慈雲飲光題 1幅

紙本墨刷 縦 78.1 cm 横 39.6 cm

江戸時代 天明 7 年 (1787) 識語

栗東市 東方山安養寺蔵

---

上段を金剛界、下段を胎蔵界とするこの版本曼荼羅は、金剛界を成身会のみとすること、その外金剛部と賢却千仏を省略すること、金剛界四仏を宝冠菩薩形とすることなどの特徴がある。このような曼荼羅は、江戸時代の真言律僧・浄厳 (1639 ~ 1702) による創出とみられる。

表具に朱書された慈雲 (1718 ~ 1804) 識語には、近世の臆断によって造立された曼荼羅であり、京都・東寺の「五彩曼荼羅」(伝真言院曼荼羅) と京都・神護寺の「金泥曼陀羅」(高雄曼荼羅) を相承本儀にすべきだとする。

浄厳と慈雲、二人の学識が交錯する作品として特に注目されるものである。

・受明灌頂印明写 戒山慧堅所用 2 通

(金剛界) 紙本墨書 縦 17.2 cm 横 48.0 cm

(胎蔵界) 紙本墨書 縦 36.4 cm 横 51.0 cm

江戸時代 17 世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

密教を深く修学しようとするものに対して、その許可を与える儀式を受明灌頂という。受者は、灌頂壇に引き入れられ、敷曼荼羅上に華を投げ、それが落ちたところの一尊を有縁として、その印明と真言を阿闍梨より授けられる。

江戸時代、この儀式を再興したのは覚彦浄厳 (1639 ~ 1702) であり、胎蔵界には、延宝 5 年 (1677) の年記、浄厳の名および朱文方印を書き記す。この 2 通の写しは、戒山慧堅の名が記された折封に収められており、朱文長方印「永鎮安養律寺」を捺されている。

・冠註即身成仏義 2 冊

(東方山安養寺文書のうち 21-044 ~ 045)

覚彦浄厳 (1639 ~ 1702) 撰

(各) 紙本墨刷 縦 27.0 cm 横 19.0 cm

江戸時代 元禄 11 年 (1698) 刊行

栗東市 東方山安養寺蔵

---

「即心成仏義」とは平安時代に真言宗を開いた空海の著述であり、本書はその注釈書である。空海は「即心成仏」(肉身をもったまま仏の境地を理解すること) を成すために、その原理と実践、心理の面から解説を行っている。

曼荼羅について示す箇所では、注釈者である浄厳の解釈がよく示されている。たとえば、金剛界を成身会のみとするのは、それのみで仏の世界を表すことが可能であるからだと指摘している。

朱文長方印「永鎮安養律寺」を捺される。

・別行法軌 1冊 (東方山安養寺文書のうち 20-097)  
覚彦浄厳 (1639～1702) 撰  
紙本墨書 縦 26.6 cm 横 19.3 cm  
江戸時代 天和 3 年 (1683) 成立  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

修法や灌頂などを実行する際の手順について細かに書き記したもの。天和 3 年、浄厳が尾道 (備後) の西園寺裏金剛院において後進のために抄書したものであるという。

浄厳の書写本をもとに書写されたものであると思われるが、書き込みからは非常に熱心に研究された様子をうかがえる。

朱文長方印「永鎮安養律寺」を捺される聖教類は、僧が教理を研究する際などに活用されるものであるために、寺内で大切に保存されている。

・放生儀 覚彦浄厳所用 1冊 (東方山安養寺文書のうち 21-050)  
紙本墨刷 縦 26.5 cm 横 16.8 cm  
江戸時代 17 世紀  
栗東市 東方山安養寺蔵

---

巻頭に朱文方印「覚彦之印」を捺し、浄厳の所持品であったと知られる書籍である。浄厳は、和泉・神鳳寺で受戒したのちに河内・延命寺を中興し、4 代将軍綱吉の帰依を受けて江戸湯島・霊雲寺を開いている。

浄厳と安養寺の直接的な関係は見当たらないが、本書が安養寺に伝来するのは、浄厳という僧が安養寺においても重要な立場にあったことをうかがわせる。

・不空羂索神变真言経 覚彦浄厳所用 2冊 (愍念寺資料のうち 251・255)  
(各)紙本墨刷 縦 27.8 cm 横 19.3 cm  
江戸時代 貞享 3 年 (1686) 識語  
湖南省 愍念寺蔵

---

愍念寺伝来の黄檗版大蔵経 (一切経) に収められるもの。黄檗版大蔵経とは、鉄眼道光によって寛文 9 年 (1669) から天和元年 (1681) にかけて板行された明版大蔵経の復刻版である。浄厳はこの板行事業に際して、秘密儀軌の編入を行っており、本書はそのひとつである。

この二冊は、『不空羂索神变真言経』全三十巻のうち、序・巻一から巻六にあたるもの。浄厳自筆による校訂・奥書があり、ともに貞享 3 年に朱書されている。

・慈雲飲光墨蹟 功德衣和歌 1幅  
慈雲飲光 (1718～1804) 筆  
紙本墨書 縦 40.2 cm 横 53.3 cm



江戸時代 寛政 10 年 (1798)

栗東市 東方山安養寺蔵

---

寛政 10 年の夏安居満了時に功德衣を衆僧に与えたときに詠んだ和歌である。「戊午秋功德衣を衆僧のうけし時よめる」とあり、「ありし世の、商那袈裟の、跡とめて、なかくも法の、命ともかな」と詠む。この和歌と功德衣は、戒山慧堅の一百年遠忌の際に開かれた灌頂壇において、伝法の証明として安養寺 7 世の希円慧鑑に贈られた。

希円は京都・阿弥陀寺で輪番を勤めた後、安養寺を継いでいるが、その師にあたるのが慈雲であった。安養寺に招かれた慈雲は、85 歳の高齢をおして灌頂壇を設け、希円に付法したのである。

・慈雲飲光墨蹟 神秀禅師・六祖大師偈 双幅

慈雲飲光 (1718 ~ 1804) 筆

(各)紙本墨書 縦 125.9 cm 横 26.4 cm

江戸時代 18 世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

神秀 (606 ~ 706) ・慧能 (638 ~ 713) という中国禅僧の偈を書く対幅。神秀は悟りのためには心身の清浄が必要であると説き、慧能は心身の清浄は悟りには不必要である、と説く。これによって、本来は同門の兄弟弟子であった二人は、神秀を北宗禅、慧能を南宗禅として区別されている。これらの偈は、北宗禅と南宗禅という両者の思想的対比を表したものである。

慈雲にとって、書とは説法に等しい重要なものである。慈雲は釈迦を唯一無二の存在として捉えており、宗派の垣根を越えて戒律を重んじることを提唱した(正法律)。

・慈雲飲光墨蹟 悉曇摩多体文 1 巻

慈雲飲光 (1718 ~ 1804) 筆

紙本墨書 縦 28.8 cm 横 306.2 cm

江戸時代 18 世紀

栗東市 東方山安養寺蔵

---

「悉曇」は梵字の字母をあらわし、「摩多」はその母音 12 字、「体文」はその子音 35 字を指す。いわば梵字のアルファベットである「摩多体文」は、多くの弟子から求められたらしく、本品以外にも慈雲筆の《摩多体文》は多数伝来する。

末尾に「マイタラメイギヤ(慈雲敬書)」と書き、白文方印「双竜之主」を捺すことから、慈雲が生駒山中の双竜庵に居住していた頃(1758 ~ 70)の作。巻頭には白文方印「竺燈」・「扇縄氏」の蔵書印があり、東方山安養寺中興 7 世の希円(きえん)慧鑑(えとう)が所持していたものであろう。

### (スポット展示) 画僧の活躍 金谷と旭応

現、栗東市の属した栗太郡(くりたぐん)からは、画家としても優れた才覚を持った僧侶が輩出されています。

下笠村(現、草津市)に生まれた横井金谷(1761～1832)は、京都・北野の浄土宗寺院、金谷山極楽寺の僧となりました。与謝蕪村の画を学び、文化元年(1804)に吉野から金峰山・大峰山・熊野へと巡り歩いた経験に基づく雄大な山水画を描く一方、宗祖法然に関する絵も多数残しています。そのような彼の人格は、書状にみられる自画像に表されています。

南山田村不動浜(現、草津市)に生まれた旭応(1739～1822)は、浄土宗の僧となって草津・西光寺に住持した後、文化7年(1810)に京都の本山・禅林寺に迎えられます。同郷の弟子・玉隣とともに墨竹画の名手として知られるほか、仏画にも優れた才覚を発揮しています。

彼らの活躍は、近世における仏教文化の一面を示すものといえるでしょう。

・横井金谷書状 宋栄寺宛 1幅

横井金谷(1761～1832)筆

紙本墨書 縦 23.7 cm 横 51.8 cm

江戸時代 19世紀

草津市 宋栄寺蔵

---

宋栄寺に対して、米2斗をもらった礼に「襖張四季画」を送ろうと思うと述べる書状。末尾には署名に代えて自画像らしきものを描く。小判型の印章を顔に見立てて自画像とするあたりに、金谷という人物の茶目っ気たっぷりな人間性を読み取ることができる。

書状に伝えられる金谷の「襖張四季画」は宋栄寺には現存せず、その存在を示す記録も残っていない。おそらく約束を果たせぬうちに没したのであろう。金谷の菩提寺はこの宋栄寺であった。

・墨竹図 自賛 1幅

旭応(1739～1822)筆

絹本墨画 縦 108.0cm 横 32.2cm

江戸時代 19世紀

個人蔵

---

竹は、蘭・菊・梅とともに四君子と呼ばれ、江戸時代の文人らにこよなく愛されたモチーフのひとつである。本図では、濃墨と淡墨を微妙に使い分けて竹の前後関係を表し、一定方向に葉先を散らすことで、竹が風になびく様を描いている。墨竹で知られた旭応の筆技の一端をうかがうことができよう。

「唯識此君真(ただこのきみのしんをしらん)、虚心絶点塵(きょしんにたえずちりをてんず)、風前尤瀟灑(ふうぜんもっともしょうしゃ)、難寫淡精神(あわきせいしんをうつしがたし)」と題しており、竹は風になびく様が最も気の利いた姿だが、それを描くことは難しいと述べている。落款には、「東

山叟」と記して、白文方印「能旭應印」、朱文方印「(不詳)」を捺す。下方に遊印として白文長方印一顆を捺す。

特集展示「近江の近世 高僧たちの仏教文化」

栗東歴史民俗博物館

平成 24 年 6 月 9 日～平成 24 年 7 月 16 日

滋賀県栗東市小野 223-8

077-554-2733

[hakubutsukan@city.ritto.lg.jp](mailto:hakubutsukan@city.ritto.lg.jp)